

Ⅳ－５

生徒指導を大切に

(1) 生徒指導について

生徒指導とは、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」です。障がいのある児童生徒の生徒指導には、以下のような課題が見られることがあります。

障がいによる生徒指導上の課題

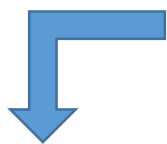
- ・ 頑張りたいという気持ちはあるが、何をどのように頑張れば良いかが分からない。
- ・ 障がい特性が問題行動の原因ではないが、適切な支援がないと問題行動のきっかけになりやすい。
- ・ 一人だけ特別扱いしたり、周りが我慢したりする状況は理解が得られにくい。
- ・ 周囲の状況に応じて適切に行動することが難しい。そのため、場面や状況にそぐわない行動をとることもある。
- ・ 幼少期から様々な困難と失敗を経験しているため、学習活動に対して意欲や自信を失い、自分にはできないと考えがちになる。 など

(2) 生徒指導を進めるに当たって

問題行動への対処といった生徒指導に終始することなく、人格の発達を促すことが大切です。そのために、生徒指導について基本的な正しい理解をもち、学校のすべての教師間で共通理解を図る必要があります。

(3) 二次的な障がいの早期発見と予防的対応

つまずきや失敗がくり返され、学校生活に対する苦手意識や挫折感が高まると、心のバランスを失い、精神的に不安定になり、様々な身体症状や精神症状が出てしまう等、二次的障がいとして不適応状態がさらに悪化してしまう場合があります。



二次的障がいは、特性に応じた支援の工夫や自尊感情を高める指導などの適切な支援があれば比較的短時間で改善していきます。早期発見と予防的対応が肝心です。

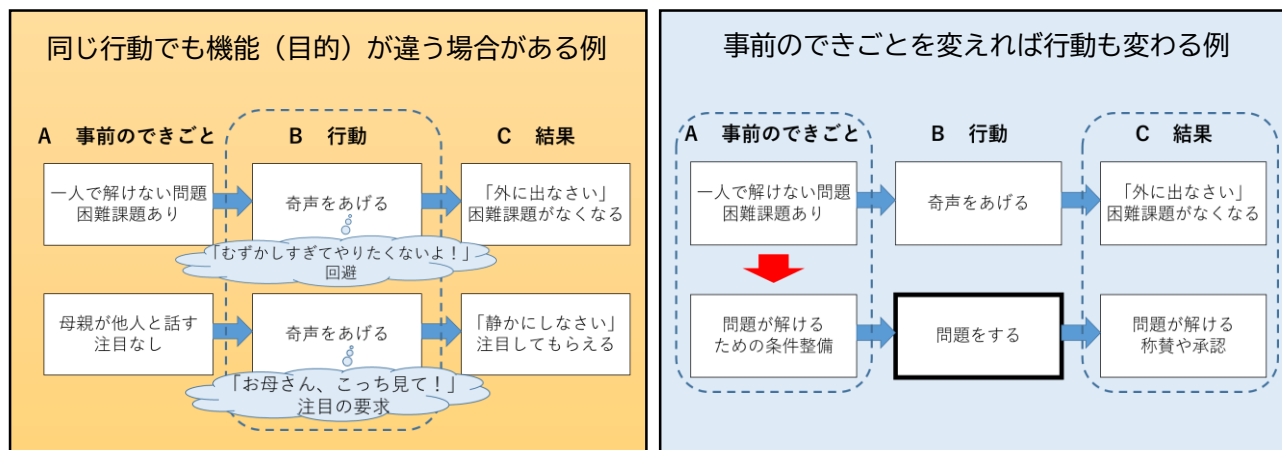


授業を始め、学校における様々な学習活動において、以下のポイントが大切です。

- ① 児童生徒が「分かった」、「できた」という達成感や成就感を感じる経験を積むこと
- ② 学級集団の中で自分の役割が与えられ、その役割をきちんと果たしていると感じられること
- ③ 取り組んでいることや役割を果たしていることを、周りの人たちにきちんと認められていること

(4) 問題行動への対応

注意や叱責により改善していくことは難しいという前提に立って、対応することが大切です。起きている行動（B行動）だけに注目せず、きっかけになること（A事前のできごと）や行動後の結果（C結果）など、前後関係を通して適切でない行動を生起させている要因を分析し、対応を考えることが肝心です。

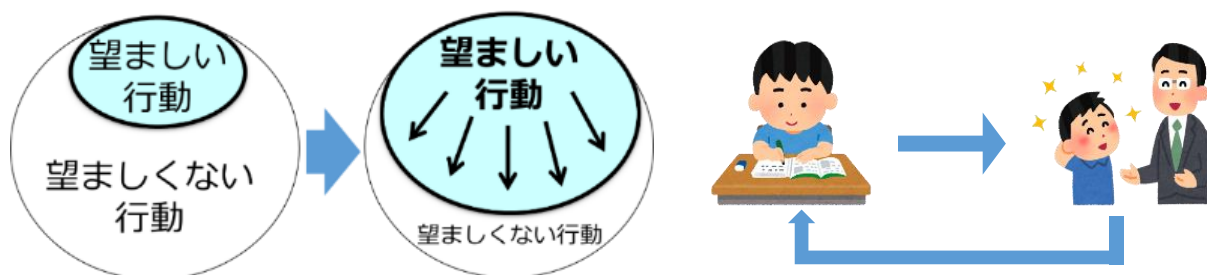


児童生徒の特性に応じた指導の基本的な姿勢は、間違いやできないことに気付かせるだけでなく、正しいこと、できるための方法を具体的に、そして丁寧に教えていくということです。

(5) ポジティブ行動支援

ポジティブ行動支援とは、望ましい行動を学習することで相対的に望ましくない行動が少なくなるという考え方です。

例えば、望ましい行動をした際、褒めることにより望ましい行動が増えたり、望ましい行動の時間が長くなったりし、繰り返すことで定着するという好循環が生まれます。



問題行動に対する過度な注意や罰を与える対応は、学校の生徒指導場面で比較的起こりやすいものです。このような対応の効果は一時的であり、以下の副次的な望ましくない作用をもたらす可能性があります。

- ・「見つからないようにやる」ということを学ぶ
- ・罰に慣れてしまう（罰のエスカレートにつながる）
- ・抑うつや場面回避、対人回避を招く
- ・自分より弱い立場の人間に罰を使うことを学ぶ



このようなことから、問題行動だけに注目をするのではなく、適切な行動に注目することが大切です。